

〈シンポジウムを受けて〉

私の内面対話

岡田 徹

昨年度の全カリ公開シンポジウム「大学で何を教えるか—全カリと専門」に引き続き、私はこのシンポジウムの準備の任にあたった委員の一人として、今回のシンポジウムに立ち会った。司会者としての役割をもって臨んだ昨年度とは違って、今年はフロアにあって報告者の話を「内面対話」しながらじっくり聞かせていただいた。以下は、全カリ・総合教育科目A群をここ2年担当し、全カリ学部運営委員でもあり、シンポジウムに参加した私の内面対話の表出（つぶやき）一部である。

今回のシンポジウムにおける3人の報告者の内容は大きく括ると、清水一彦氏による単位制度をめぐる論議、藤原新氏の全カリ改革についての中間報告、そして木下康仁氏の授業経験から引き出された知見、の3点である。構成としては全カリ総合教育科目に関するシステム（器）と内容（中身）がバランスよく配されていたように思う。

今回とくに私の興味を引いた点は以下に取りあげる2点である。これらの点はまたこのシンポジウムの主たる論

点でもあったように思う。

履修制限の問題

まず第1の論点は履修制限の問題である。

清水氏はアメリカ合衆国の例をひいて「1日4科目も履修できるような時間割を組ましてはダメなのです。…1学期に5科目程度(15単位)の履修をさせるカリキュラム編成すべきです」と主張された。このことはまた藤原氏からも、総合Aに関する検討グループにおける重要な検討課題であり、近い将来、各学期の履修単位に上限をもうける旨の発言があった。

いずれの発言も、そのねらいは履修科目の厳選、そのことによる学生の履修負担の軽減、そのことが予習・復習時間の確保を生み、学習効果を高めることにむずびつくものと期待されている。1日4科目も履修させるのではなく、1日に午前・午後一つずつの計2科目、それを週4日間程度でも、合計16単位履修できる。一セメスターでこれだけ取れば、4年で128単位となり、卒業単位は軽々とクリアーできる。

理屈のうえではそうかもしれないが、しかしアメリカ合衆国とは国状や教育システム、学生気質等々を異にするわが国において果たしてこうした措置の導入は可能だろうか。むろん規則をつくって履修制限すれば、形の上では可能ではあるかもしれない。が、実現したとしても、はたしてこちらの狙いどおり効を奏するだろうか。その実効性には疑問の余地がなしとはしない。

私のつぶやきはこうである。空いた時間を学生たちは何に充てるだろうか。予習・復習に充てるだろうか。ゆとりを持った分だけ、ぶらりと研究室を訪ねて来て論談風発の機会をもつだろうか。そんなことは期待できそうにないな。バイトや遊びに充てるだけではないか。いや、もっと前向きに若い人たちを信頼しよう。こんな疑問がつぎつぎに湧きおこってきた。

ここで自分の学生時代を思い出した。もちろんはるか昔の、私の個人的体験を語っても参考になるようなことは何もないが、この問題を考えている「私」が自分の出自を意識化することによって学生たちにない物ねだりをしないで済んだり、また自分ができなかったことを棚上げしてものをいう誤謬をさけることができるかもしれない。

教養課程の1年生時にはご多聞にもれず、今私たちが憂慮しているように、私は教養科目で時間割を埋めつくしていたように思う。2年生になると専門科目の一部が履修でき、大学に来た実

感をもった。この時にも教養科目が相当あり、やはり時間割を埋め尽くすほど目一杯とっていた。3年生になってやっと自分の志望する専門ゼミに入れて、専門ゼミを中心にした専門科目にメリハリつけて履修した。自分の関心の周縁にある科目は履修登録だけして授業には出なかった。試験には友人のノートを借りて一夜づけて臨んだ。4年生では専門ゼミを除けば、2科目ぐらゐの履修で済んだ。同じように関心のない科目であったので友人のノートで凌いだ。時間はたっぷりできた。「小人閑ありて悪事をなす」たぐいのことも少なくなかったが、空いた時間を全部それに充てるには時間がすぎた。そこで他大学に盗講に出掛けたり、他学部の外書講読や講義を取った。自分が望まない他から強制されたものかわわして、取らなくてもよいものをとる盗講・聴講体験は所属学部の授業とは違ったある至福の感覚を私にあたえてくれた。結果として、そこでのある教員との出会いが機縁になって聴講した学部の一つの大学院に進むことになり、今に至っている。

とりとめのない私事を記したが、むろん時代や状況を異にしているし、私の個人的な体験であるので、ここから引き出される知見や教訓はなにもない。ただ青年期のどまんなかで固有の時間が享受できたことに感謝したい気持ちをもったことを伝えておきたいと思っただけである。

さて、時間割を埋め尽くさせなければ、今の学生たち一人ひとりとはどのような時間の使い方をするだろうか。千差万別でおもしろい結果が生まれるかもしれない。限られたもの小教科目を厳選することになれば、すでに、コミュニティ福祉学部では制度化されているアドバイザー制やオフィス・アワーの利用を増し、履修・修学相談が活発化するかもしれない。そうでないかもしれない。

いくぶん消極的な言い方になったかもしれないが、私個人としては履修科目の制限を支持する。ただし、この措置の導入は個別、コミュニティ福祉学部にとっては大きな波紋を呼び起こすことになるかもしれない。というのは、この学部には国家資格試験の受験指定科目が多く配置されていて、学生たちは学年指定を受け、カリキュラムが過密だからである。

系統的学習かアラカルト的学習か

第2の論点としては、科目を厳選した系統的学習か、それとも多様な科目のアラカルト的展開かという問題である。清水氏が提起した「系統的学習の保障をどうするかが問題である」ということに端を発して交わされた議論がこれである。同じ問題に藤原氏は、「アラカルト方式でいかに系統的履修を保障するかが課題である」と応じ、改革案のなかで「履修モデルの提示」を考

えていることが披露された。木下氏の意見は、「系統性、体系性を否定する訳ではないが、提供する側の意図と選択する側の意図を一本の線で結ばなければいけないのか」と疑問を投げかけられている。

知の学際化と総合化の時代的要請は「総合B」に期するとして、総合Aをどう構想するか。ここでは総合Aに限定してそのあり方を考えてみたい。

シンポジウムでは発言はしなかったが、私の個人的な意見を述べれば、木下氏見解に近い。また所氏の発言にある「多様な科目の展開を学生が自分の責任で総合する」という意見とも近い。つまり系統的学習は求めなくてもよいと思う。系統的な学習の保障は専門学部でおこなう以外に方法はないと考えている。むろん理想論をいえば、多様な科目も系統的学習（履修）も両方とも、ということかもしれない。しかしこれは至難の技である。

科目間の何がしかの整合性・系統性が必要であるというのであれば、これをたとえば「履修モデル」によって可能にするのも一案ではあろう。総合Aの多様なアラカルトの中から、何を取るか、あるいは何に先立って何をとりかといったことの大まかな目安を「履修モデル」で示すことはあっても良いと思うが、全カリ総合A群の真価はそこにはないと思う。要は発信する教員と受け取る学生個々の間の「切り結

び」に委ねなければならない話しではなからうか。

専門科目の場合はこれと趣を異にする。なぜなら専門学問の知は細分化され、かつ個々の知は体系性を強くもっているかである。知の系統性・体系性の訓練はそちらでじっくりやってもらうとして、全カリの知の目的はそれとは異なる。系統的学習（履修）が中身の系統性であるならば、私が担当する全カリの総合Aの科目（国際化と社会福祉）では、系統的な授業は断念している。

理由は木下氏が指摘する点とおなじである。私の場合でいえば、コミュニティ福祉学部以外の、つまり社会福祉（学）の基礎をもたない、あるいはこれから体系的に学習することのない学生に向けて、半年の12、3回程度の授業で系統立て社会福祉を教えることは不可能であると判断するからである。

では教員は何を教えるか、学生は何を学ぶか。

私は過去の授業でうまくいったという自信は少しも持たないが、このようなことを伝えたいと念じてきた。同時代を生き合いたい。もちろん授業のなかでそんな大仰なことができる夢みる年頃ではもはや私はないことは承知している。にもかかわらず、である。

昨年担当した「社会福祉の近未来」にせよ、今年担当している「社会福祉と国際化」にせよ、私は福祉を「人と社会的世界」の苦難に関わる営みであると捉え、そこに立ち向かう人に求め

られているものは知の「広さ（体系性）」と知の「深さ（原理性）」であり、それをいかに繊細、かつしなやかに伝えるかに腐心している。事実の説明や論理の組み立て方以上に、そこから引き出され得られた知見の提示を重視すべきではないかと思っている。

たとえば今年度の授業では、こんな話しをした。福祉は人権によって存立しているにもかかわらず、その内部において人権が守られていないのはなぜか。戦争は福祉の対極にあるものであり、一度戦争が起これば大量殺戮や生活破壊が起こるわけであるが、にもかかわらず戦争によって（戦争のお陰で！）福祉が進展してきたという事実をどのように考えたらよいか。これらの逆説的事態をどう読むか。こうした知見を提示して学生たちが自明視していることに揺さぶりをかけて省察を促す。あるいは一世紀にわたる社会福祉の経験や思想、知見や視点を提示して、自分の専門研究に照らして吟味し、また自分の生活や人生の問題として受け止めてもらいたいと願っている。

報告のなかにあるような「1、2単位科目の切り売り」とか雑多な科目による「断片的知識や入門的な知識のばら撒き」、という恐れはなしとしませんが、そうならないように努めるのが担当者の力量であり、また求められている力技でもある。

授業内容の充実こそ

システムについての検討は重要であるし、その任に当たった人の苦労を多とするものの、全員が均等に「システムづくり」に関与しなければならないという訳ではなかろう。要は構築されたシステムの意図を私たちが共有し、全カリに関わるることになったとき教員で行わなければならないことは、担当しないときでも自分の専門学部のカリキュラムや自分が担当する授業においてそれをいかに実現するか、授業内容をいかに充実させるかという問題であろう。さらに課題をあげれば、いま議論されている「総コマ数のスリム化」をどうするか、全カリと学部基礎教育（専門教育）との連携をどうはかるか。昨年のシンポジウムの中で明確化された点である、国家主導の教育改革によって進行している「専門基礎学の空洞化」「知の技法化やマニュアル化」をどう防ぐか、難題は目白押しである。

聞くとところによれば、全カリが旧一般教育に代わって登場しても、その中身は旧態然としているという学生の声があるそうである。そういうこともあるとおもう。だが、専門科目とは異なって、「全カリ」はひとつの実験であり、その授業にはまだ王道はないとみるべきである。学生の批判には謙虚に耳を傾け、こちらも悪戦苦闘している姿をみせたらよいとおもう。それが口先だけのきれいごとにならないためにも、中身の充実にむけて、何をどう教えるか（じつはこのテーマは昨年度のシンポジウムのテーマであった）について、来年も全カリ科目を担当する予定である私としては、日常的に学びあうFDのような機会をもち学びあいたいという切なる願いをもっている。

（おかだ とおる 本学コミュニティ福祉学部教授
全カリ運営センター研究開発広報委員）